

年間第18主日

福音朗読 ヨハネ 6・24-35

2024.8.4 9:30 ミサ  
カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

イエス様は人々に、互いに愛し合うこと、それが神様が望んでいらっしゃることで、互いに愛し合うならばわたしたちは生きる力をいつも神様からいただくことができる、神様から力をいただいて互いに愛し合い、互いに愛し合うことを通して更に力をいただくという——マタイやマルコの福音書では「神の国」っていうような表現ですけども——その神様と人とのつながりの中にみんなを呼んでいらっしゃるわけです。

でも、今日の福音ではそのつながりがいかにすばらしいかっていうことを示そうとして行ったイエス様のしるし——奇跡ですね、その奇跡とは何かと言えば、先週のごミサで朗読されたと思いますけども、5千人の人がわずかな食べ物で、でもイエス様からいただいたら満腹したっていうその特別な出来事——を、人々は「また行ってください」という、そのところに留まってしまっている、そうではなくて、その出来事が表そうとしているイエス様が言いたいことを受け取って欲しいというふうに語り始められたっていうのが今日の福音です。

今日も含めて4週間にわたってイエス様のそういうお話がヨハネの福音書から朗読されていくこととなります。先週もヨハネだったので5週間——今年はB年で基本的にはマルコの福音書から朗読されますけども、この一ヶ月ちよつとの間はヨハネの福音書から。そしてヨハネの福音書を通して、イエス様がほんとにわたしたちに渡したいもの、それはご自分の命なんだ、その命とは何かと言えば、互いに愛し合うことなんだ、というふうに続いて行くこととなります。

わたしたちもそれぞれ、いつもイエス様を通して力をいただくことができますように、イエス様との一致を改めて求め、そしていただきたい。それがごミサのたびごとにわたしたちが神様にみんなでお願いしていることです。

今日8月4日は、冒頭にも申しましたけども、高円寺教会の守護聖人であるヨハネ・マリア・ビアンネの記念日に当たっています。でも日曜日になったときには、記念日のごミサじゃなくて日曜日のごミサが優先されますから、普段通りごミサをお捧げしているわけですけども、ヨハネ・マリア・ビアンネについて少し思い起こしておきたいと思います。

ヨハネ・マリア・ビアンネは、主には19世紀に活動したフランスの教区の神父さんです。生まれたのは1786年。そして1815年に29歳で司祭になり、1818年からアルスという小さな村の司祭になって、その後40年近くその教会の司

牧に携わり、その村の人だけではなくて多くの人がビアンネを訪れて、その信仰の恵みを受けたと言われています。1859年8月4日に帰天したので、8月4日が記念日ということになっています。

ビアンネ自身もイエス様との一致を絶えず求めて、そしてそれに基づいていろいろな活動をされた方です。ビアンネの生涯にはいろんな不思議なエピソードがあります。

そもそもビアンネが子どもの頃はフランス革命の混乱の時代で、フランス全土で10年近くミサが禁止されていたわけです。だから洗礼式も初聖体式も秘密のうちに行われたと言われています。そういう環境の中で、でも神様との一致を<sup>はぐく</sup>育み、そして一致に基づいて人々に奉仕するという生涯を歩んだわけです。で、そのビアンネの生き方、その姿に触れて、多くの人々がまた影響を受けたということです。

その生涯のうちのいろんな不思議な出来事がいくつも語られていますけども、その一つは、ビアンネはその生涯において、本人は貧しい人なんですけども、教会のために、また孤児院を開きましたけども、その子どもたちのためには、ほんとにその活動資金や食べ物が無くなりそうなのに無くならないっていう、ほんとにもうパンを作る小麦がちょっとしかなくなった、<sup>あした</sup>明日はもう無いというときに突然増えりとか、そういうようなまさにイエス様の聖書に出て来るような不思議な出来事があつたっていうふうに。ビアンネ自身は贅沢は——このご像（注：説教台近くのビアンネ祭壇のご像）でも分かるようにもう栄養失調になるくらい質素な生活なんですけども、活動のためにはほんとに無くなりそうだけ無くならないで、そしてそれが続けることができたっていうことが、一つの大きな不思議な、神様から与えられたしるしっていうふうに見ることができます。

まあ、それはもちろんビアンネが聖人だから、ということかもしれませんけども、でも無くなりそうなのに無くならないっていうことは、考えてみると、わたし、あるいは同じように思われる方もいらっしゃると思いますけども、信仰の恵みそのものが自分の中の心を振り返ってみても、神様なんていつも忘れて、無くなりそうなのに、でもまだ今日もこうしてわたしたちはともにごミサを捧げているっていうことそのものが、ある意味では大きな不思議な恵み——何か特別な出来事だけが奇跡なのではなくて、わたしたちの心の中にある神様とつながっていこうとする信仰そのものは、ほんとにいろんな形でそうではないものに引きずられる力の中で生活しながら、無くなりそうなのにでも無くならないんだ、で、今に至っているということの中に神様の計らいを見ることができるのではないかなと思います。

そのようにして神様につながっていく者は、やがてイエス様との一致から力をいただいて互いに愛し合う。それはわたしたちにとっての人生の根っこのようなもの——そこから絶えず力を、養分を受け取り続けることができる。信仰と

はわたしたちの生きていく根っこというふうに言うことができます。それなくしては、人々は、わたしたちは切り花のようなものであって、今あるその蓄えていたものが無くなれば枯れてしまうし、水がある所にいればしばらくその力は続くかもしれないけど、やがて枯れて無くなってしまう、というわけです。

周りの環境に影響されながら、だんだんだんだん力が無くなっていく。でも信仰を持って、神様とつながる者は絶えずそこから新たな力を得ることができるのだ、というのがイエス様がなされた奇跡が表していることだし、聖ビアンネの生涯が教えてくれたことなのではないかなあと 생각합니다。

わたしたちも、今日聖人の取り次ぎに——いつも天国で祈ってくださっている聖人たちがいると信じています——その取り次ぎに支えられ、また神様ご自身の招きに力づけられながら、一人ひとりがイエス様から新しい力をいただいて、それぞれの場で互いに愛し合うことができるように信じる者であるように、その恵みを願い合いながら、このごミサをお捧げしたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>